

さる宮へ注連はためかす野分かな	良子	秋の昼生活の水の豊かなり	てん子
川底は流れてをらず水の秋	てん子	猿宮の鳳凰古りて秋うらら	幸子
水澄むや絶滅危惧種生きてをり	典子	S Lの汽笛野分がふくらます	紀子
猿宮の白き御幣や秋の風	博定	巖島神社道より低く水澄めり	良子
志士達と同じ月見る勘場跡	博定	水底に銀杏一つ沈みけり	しょうくん
秋祭へにぎにぎ設ふ男衆	良子	空真青はためく幟秋社日	延子
いたずらに帽子とばすや草の花	てん子	境内の老木揚げば秋の空	保江
高女跡に立てばはは笑む秋日和	良子	機関車の風轟かせ花野行く	保江
腰少しひねる菩薩や秋日差	典子	境内の走り根つまづく螢草	延子
高女跡やぶかんぞうの花ゆるる	幸子	線路脇まだ素面です酔芙蓉	隆行
秋の川幟二本の鳴ってゐる	てん子	青春の車窓今ゆく大花野	良子
厨子開いて秋光まとふ観世音	紀子	爽籟や歩をゆるめつつ勘場跡	てん子
秋風にコスモス一輪泳ぎけり	しょうくん	秋の宮水音持たぬ流れあり	紀子
挨拶の汽笛二声天高し	典子	散り初むるポプラの紅葉拾ひけり	幸子
両側を御幣の道や秋吟行	かこ	秋風に注連鳴る東津通りかな	紀子
水澄みて魚影の動く川の道	幸子	秋祭たなびくのぼりいきいきと	しょうくん
大楠の木肌ゴツゴツ野分風	典子	在りし日のなごりも見えず勘場跡	しょうくん
秋空に音ひびかせる幟旗	幸子	勘場の名残の大楠天高し	延子
みほとけを拝せし秋思持ち歩く	紀子	右から読む横書看板秋暑し	延子
蒸気機関さびたレールを踏み鳴らし	しょうくん	奥深き菩薩に集まる秋の陽や	保江
見ぬ先の汽笛を運ぶ野分かな	陽子	花一つ残して秋の水路なり	陽子
吟行やさであるむかごと聞く訛	延子	江戸の道いま平成の秋深む	賀代子
面映ゆい娘と二人夜長かな	帛子	遙か彼方先の話か金木屋	帛子
山頭火何者かと問う赤蜻蛉	帛子	砂利踏みし御仏の笑み酔芙蓉	帛子
古き宮格天井へも野分き抜け	帛子	風渡りコスモス畑や色の帯	保江

コスモスの線路をこえて街へ行く	陽子	境内の木の実ついばむ影数多	純子
幟立つ氏子の意気や野分来る	保江	観世音にまみゆ吟行秋うらら	千鶴子
大風をはらみて祭の幡が立ち	陽子	小鳥来る路地をまがれば製帽所	縁
こすもすの風に帽子をおさへつつ	賀代子	露の径すこし先行く山頭火	路子
秋蝶や風のみ通る道標	賀代子	ドドという猫死んでマンジュシヤゲ	健一
猿宮の古き扁額小鳥くる	賀代子	秋祭り壮老幟をおしたてて	隆行
巨樹祠鳥居の奥の秋の声	賀代子	勘場茶屋高女跡なり秋の声	路子
祭礼の用意たけなわ小鳥来る	路子	野分めく祭の幟ぐいと立て	久子
無患子の実を分け合うて風の中	紀子	猿宮といふ風の杜小鳥来る	利幸
野分だつ勘場跡又御茶屋跡	利幸	収穫はいかがと思案勘場かな	隆行
声合はせ幟の立ちて秋祭	純子	良妻賢母巢立ちし跡や野紺菊	純子
旧街道の軒の低さや水澄める	久美子	東津の水を豊かに秋まつり	千鶴子
秋天や汽笛の中に帽子ふる	千鶴子	蓼の花風の色添え草の原	久美子
ブランコのさびれる庭の赤まんま	陽子	天高し日本最古の金物屋	縁
江戸の絵図なぞりて巡る秋日和	路子	花の名聞いてうなづいている	健一
秋風に石の眼ひらく生目様	久子	山頭火抱いて心は旅の空	健一
秋草で染め秋色の人となる	利幸	水澄むや金物店の七代目	久子
秋風や栄枯見つめし道標	純子	秋の風入れてうれしや聖観音	隆行
手にふれて秋陽あまねし道しるべ	千鶴子	秋桜線路の中にしぼし立つ	富清
秋晴に歩いて知るや勘場跡	久美子	豊年や築百年の金物屋	利幸
風荒き勘場の馬場の秋桜	縁	吟行へスコーンと晴れし秋の空	隆行
芋嵐押し返さるる汽笛かな	縁	いにしへの道標のあり秋日和	かこ
無頼ともなれず吹ききたる草の絮	路子	菩薩にも流転のあとや草の絮	純子
大楠の下に集へば秋日濃し	久子	山頭火の句碑なぞり詠む柿日和	千鶴子
秋草を踏みS Lを待ちにけり	利幸	紫蘇の実の見向きもされず零れけり	富清

歩き来て古ぶ社に秋の風

かこ

野分け吹くやつと立ちたる幟旗

富清

猿宮の幟はためく秋祭り

久美子

猿宮の秋の大祭古史をきく

かこ

ガラス戸の内の昭和や柿日和

縁

天高し沓履く犬の散歩かな

健一

お彼岸の心しみじみ祈りの日

健一

秋一日俳句ウォーク新発見

かこ

姫りんごもてなし添へて句会かな

かこ

秋まつり準備の中に友のをり

富清

暑くても秋は秋の風

健一

幟たて秋まつり待つ男衆

かこ

